
錬金術師へ続く道

因幡の雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術師へ続く道

【Nコード】

N2089Y

【作者名】

因幡の雪兎

【あらすじ】

現代世界から異世界へと転移した少女が元の世界に帰ることを目標に錬金術を学ぶ話です。

本作品はアトリエシリーズの二次創作となっています。

01：出会い（前書き）

小説を書くこと自体が久しぶりの為内容や表現に拙い部分があるか
と思われます。

駄文じゃないか、と言われるかもしれませんが宜しければお付き合
いください。

01: 出会い

「気がついた？」

木漏れ日が差し込む緑の天蓋をバックに、雪の顔を心配そうに覗き込んでいる女性が言った。

年齢は恐らく10代後半〜20代前半、まだ中学生になったばかりの雪からすればすごく年上の人物だ。

袖上から長い布を下げたファンタジーのお姫様が身につけているような浅黄色の可愛いらしいドレスを着ている。

顔は……。可愛くて綺麗。橙かった明るい金色の髪、深窓の令嬢を思わせる繊細そうな印象を受けながらもその内側に何処か活発な印象が見え隠れする白い肌、そしてぱっちりとした黒い二つの瞳。その二つの瞳が興味深そうに、雪を見下ろしていた。

「えっと……はい」

状況が良く飲み込めない、この女性は誰なのだろう？ここはどこなのだろう？

考えようとしても倦怠感と疲労が全身を包んでおり頭がよく働かない。

運転があまり上手でないバスや自動車に長時間揺さぶられた時のような気持ちの悪さだ。

「森をお散歩していたらいきなり私の前に現れて、そのまま倒れた時はびっくりしちゃったわ。熱は無いみたいだけど、何処か痛む所はある？」

小さく首をかしげながら雪の額に手を当て、具合の悪い所は無い？

と問いかける女性。

首を縦に振ることと答えようとした雪は首筋に当たる柔らかい感覚と温かさに気が付き、自分が女性に膝枕をされているということを理解した。

慌てて体を起こす。

年上の見知らぬ女の人に膝枕で看病してもらったなんて、恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「大丈夫急に体を起こしたりして? ……それとなんだか顔が赤くなってるわよ?」

「い、いえいえっ、全然全く本当に大丈夫です!」

「本当に?」

「本当にほんとでふっ、あ」

焦るあまり舌がもつれた、しかも噛んだ。全身に痺れが走るほどに痛い。

雪は口元を押さえてその場に崩れ落ち、目尻に涙を浮かべてふるふると震えた。

「あらら……大丈夫じゃなくなっちゃったみたいね」

女性はそう言っ腰に下げていたポーチから小さな十字架を取り出す。

一般的な十字架とは少し形が違い、頂点の部分が中心が空洞となつた円状の十字架……所謂アंकと呼ばれるものだ。

そのアंकを両手で握って、小さく何かを呟くとアंकから光が溢れて雪を包み込んだ。

同時に口の中の痛みと全身を覆っていた倦怠感が引いていく。

「これで大丈夫？」

雪は自分の体に起こった変化に眼をぱちぱちさせた。

あれだけ痛かった舌に痛みはもうない。恐る恐る嚙んでしまった舌の表面を指で撫でて傷らしきものは見られず腫れもない。

まるで魔法か超能力だ、一瞬で傷を治すなんてそうだししか思えない。

「は、はい、大丈夫です。」

「あんまり焦るとまた舌を嚙んじゃうからゆっくりでいいですよ」

興奮を抑えきれない様子ではしゃぐ雪に優しく笑いかけ、女性はアソックスをポーチへと戻す。

「自己紹介がまだでしたね、私はラステル・ビハウゼンと言います。貴方は？」

「あ、はい。わたしの名前は雪です、あまみやゆき天宮雪」

女性の名前を聞き、外人さんなのかな？でも凄い日本語が上手だからハーフなのかもと考えながら雪も自己紹介を返す。

「アマミヤちゃんって呼べばいいのかな？それともユキちゃん？」

「あ、ユキの方が名前なので出来れば其方をお願いしてもいいですか？ビハウゼンさん」

一卵性双生児である雪は双子の妹と区別を付ける為、苗字よりも名前と呼ばれる事が多い。

家庭でも学校でも”アマミヤ”でなく”ユキ”と呼ばれる事が多く、苗字よりも名前で呼ばれる方に慣れている。

「ビハウゼンさん、じゃなくてラステルでいいですよ、私も家名じゃなくて名前で呼ばれる方が嬉しいです」

「わかりました、ラステルさん」

にこやかに微笑むラステルが差し出した手を取り、立ちあがる雪。お互いにもう一度名前を呼び合って自己紹介を終える。

この辺りでようやく頭がはつきりとしてきた雪は自分が抱いている疑問（ここはどこなのか、自分はどのように倒れていたのか）をラステルに問いかけようとする。

しかし、それより早くラステルが発した言葉を聞いて雪の思考は停止してしまった。

「所でユキちゃんは妖精さん？それとも錬金術師さんかな？」

02：回想と告白

「ユキちゃんは妖精さん？それとも錬金術師さん？」

ラストエルが発した疑問は雪の思考を停止させるに十分な言葉だった。妖精。錬金術師。この二つの言葉自体は雪も十二分に知っている。どちらも空想、ファンタジーの世界の住人であり様々な物語に登場しているものだ。

雪も様々な物語の中で彼らと出会い、彼らが繰り広げる魔法と神秘を駆使した大活躍を見て胸を躍らせていた。

しかし、自分がその妖精や錬金術師に間違えられるとは夢にも思わなかったのである。

なにせ現在雪が着ている服はセピア色のブレザーとスカート、少々古風な感じがしないでもないがどう見ても一般的な学生の姿である。この姿を見て妖精や錬金術師を想像するような人物は少なくとも彼女の知る限り存在しない。その為。

（優しいお姉さんだと思ったら電波な人だったのかなあ……）

と、始めは少々失礼な想像をしてしまった雪だが、自分が置かれている状況を冷静に分析するとラストエルの言葉は電波なものでなく、至極全うな疑問なのかもしれないと感じた。

何せ先ほどラストエルが用いたアंकのように怪我を一瞬で直してしまふ魔法のような道具が存在しているのだ。

少なくとも日本、いや地球全体を通してそんな道具は見たことも聞いたこともない。

これは自分が見ている夢だという可能性も考えてみたが肌に感じる

風の感触や木々の匂い、そして先ほどすっかり噛んでしまった時に感じた舌の痛みを考えると、夢だとは思えない。

と、いう事はこれは現実であり雪は自分の知らない場所、恐らくフアンタジーな世界に迷い込んでしまったのではないかと、とりあえずの結論を付けることにした。

(……だとすると、なんでわたしはここに来ちゃったんだろう……)

雪は目を閉じ、1つずつ記憶の糸を手繰り寄せて繋ぎ合わせる。

自分が目覚める前、何時。何処で。何をしていたのかを……。

天宮雪。地方都市に存在する私立学園に通う12歳。

運動神経は良好で特に走ることが好き。成績は中の上でやや文系よりだが英語は苦手気味。

家族構成は父の道行、母の風香、永遠の17歳を自称する姉の蒼と双子の妹の瑠璃。

性格面は温和で裏表があまりない。正義感が強く頼まれごとを引きうけると嫌と言えない為、良く苦勞を背負い込む性質である。

身長は123?、字面にしてみるとリズムがあり聞こえがいいが本人にとってはどうでもいい。

年下に見られることが多いし高い所にあるものを取るのに椅子を使わなければならない。

中学生になっても制服を脱げば小学生扱いの為、速く背が伸びてほしいと常々思っている。

そんな雪は、ほんの数十分前まで、ごく普通の学園生活を送ってい

た。

初等部から中等部へと進級し、サークル活動への参加が許可された為、瑠璃と二人で学生手帳を片手に広い学園の中を回って部活動の見学を行っていた。

全校集会でのプレゼンテーションを軽く聞いただけでも様々な活動をしているサークルがあるのが分かり、これからどんなサークルに入ろうか、どんなことをやろうかといった思いが止まらない。

あまり楽しい思い出の無かった小学生の時とは違う、楽しい学園生活への期待が高まりわくわくした気持ちで胸が満たされていた。

そして『展示中・見学自由』と書かれたプレートが下げられたとあるサークルの部屋に立ち寄った所、雪は机の上に置いてある奇妙なものを発見した。

両手にすっぽりと収まる小さなそれは一見すると変わったデザインの砂時計にしか見えない。

硝子で出来た砂時計の本体を象牙のような材質でできたリング状のフレーム2つが支えている。

そのフレーム部分にはびっしりとよくわからない文字が刻まれており、雪の好奇心を激しく刺激した。

雪が更に注目した点は、その砂時計の砂が”下から上へと流れている”ことだった。

手にとってよく眺めてみると、砂時計の底から湧き出している（ようにしか見えない）金色の砂が重力に逆らって舞い上がり、中心を通って頭の部分へ”昇って行く”様子が良く分かる。

しかも、いつまでたっても頭の部分に砂が溜まることは無い、見れば見るほど不思議な砂時計。

雪と瑠璃はいつしかその砂時計に夢中になっていた。

部屋が無人であり見学自由と明記されていたので、思う存分様々な角度から砂時計を観察してどうして砂がこんな動きをするのかを確かめようとした。

そして砂が湧き出す底の暗い部分に何があるのか見てみようと思

計を蛍光灯の灯りに翳したその時に異変は起こった。

翳した砂時計の硝子部分が突然砕け散り、辺りに黄金の光を纏った砂が降り注ぐ。

同時に雪の体に激しいショックが襲いかかり、視界が一瞬で白一色に塗りつぶされた。

急速に意識が遠くなり……意識を取り戻した時、そこはラステルの膝の上だった。

(……うーん、だとするとやっぱりあの”砂時計”が原因なのかな)

「あの……ユキちゃん、私の言ってる事聞こえてますか？」

「ああっ、ごめんなさい！」

考えることに集中すると周りが見えなくなってしまうのが雪の悪い癖だ。

慌ててラステルに頭を下げ、自分が妖精でも錬金術師でもない事を説明する。

「うーん……私の目の前にいきなり現れたってことは錬金術師さんだと思っただけだなあ」

「ごめんなさい、なんだか期待を裏切っちゃったみたいで……」

「いえ、私が勝手に期待してしまっただけなので気にしないでください」

そう言って笑うラステルだが、雪はその笑顔が少し寂しそうに見えた。

「あの……所でわたしからも1つ質問しても良いですか？」

「いいですよ、ユキちゃんは何が効きたいんですか？」

「えーっと……ちょっと長くなっちゃうんですけど……」

と前置きをして、雪は自分が目覚めるまでの出来事を説明する。

学校で不思議な砂時計を見つけ、妹と二人で眺めていたら砂時計が砕けて光にのみ込まれ、気が付いたらラステルに膝枕をされていたという事を話す。

「……なので、ここが何処なのか分からないんです」

そういつて雪は顔を伏せる。正直な所自分の言葉を信じてもらえるとは思えない。

魔法のようなよくわからない道具で知らない場所からここまで飛んで来たんです。

しかも飛んで来た時は気を失っていたので何が何だか分からないです。

そんなことを言う人がいたら、頭がおかしいんじゃない？と普通は笑い飛ばされる。

それに、もし仮に信じてもらえたにしても話が大きすぎる。

見たことも聞いたこともない場所へ帰る方法なんて分かる筈が無い。荒唐無稽な話を聞いて、言葉に詰まってしまっただろう。

事実、ラステルも雪の説明を聞き終えてから一言も言葉を発していない。

「……やっぱり、信じてもらえないですよね？」

「そんなことないですよ？」

その言葉を聞いて雪が恐る恐る顔を上げるとラステルはにこやかに笑っていた。

取り繕った笑みでも同情でもない、幼い子供が浮かべるような輝く笑顔が雪の目の前にあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2089y/>

錬金術師へ続く道

2011年11月13日11時19分発行